

<デジタル発>「ゼロコロナ」の中国へ ゆるくなかった入国 <隔離編> 2週間缶詰 廊下に出たら警告音

2022/7/8 北海道新聞

7月1日付で東京から北京への転勤を命じられ、さまざまな壁を乗り越えながら、ようやく中国北東部・大連の空港に着いた記者の私（42）。新型コロナウイルスのまん延を防ぐ「ゼロコロナ政策」のため、北京に向かう前に大連のホテルで14日間の隔離生活を送らなければなりません。先導するのは、やはり全身に白い防護服をまとった「大白（ダーバイ）」と呼ばれるスタッフたち。果たしてどんな14日間の待ち受けているのか。（北京駐在 古田夏也、写真も）

■いざ、隔離先のホテルへ

6月14日、大連空港に着くと、私を含む約20人の日本人一行は、バスに乗せられて隔離先のホテルに向かいました。行き先は事前に説明されません。もちろん、選ぶこともできません。新型コロナの感染対策で、バスの中はクーラーが止められ熱気ムンムン。窓が曇って外はよく見えず、どこに向かうのか、不安ばかりが募ります。

出発から約40分、バスが止まりました。目的地に到着したようです。建物の看板には「大連九州国際大酒店」とありました。「酒店」と言っても酒屋や飲み屋ではなく、中国語で「ホテル」の意味です。後ほどホームページで確認すると、366室を備えた大きなインターナショナルホテルで、場所は大連中心部でした。入り口には「集中隔離施設」との張り紙があります。立派なホテルを隔離専用に使っているようです。

ホテルに入る際の手続きでは、A4判1枚の「告知書」が渡されました。表と裏に14日間の隔離生活のルールが細かく日本語で記されていました。

冒頭には、このような一文がありました。

「中華人民共和国伝染病予防・治療法」と大連市疫情予防・コントロール指揮部の関連規定に基づき、全民の健康を確保するために、共同で疫病に対処する。

続く文章には期間中のルールが記されていました。

▽外出は禁止、ネットの買い物や出前も禁



隔離先のホテルの入り口に張られていた張り紙。一般客は入れないようになっていました



隔離ホテルの受け付けに並ぶ日本人グループ一行。奥に見える白い防護服姿の人たちはホテルのスタッフです

止です。

● もし、どうしても外での買い出しが必要ならホテルの社長が代行します。

▽食事は1日3食。決められた時間にドア前のベンチに置きます。

朝食は7時半～8時半、昼食は11時半～12時半、夕食は17時半～18時半

▽4日目、7日目、10日目、14日目に、それぞれPCR検査を行います。14日目はそれとは別に血清抗体検査を実施します。

▽体温が37.2度を超えたら社長に報告してください

宿泊料は、1泊550元（3食付き、日本円で約1万1千円）でした。そのほか検査代が4回分で計116.9元（約2300円）と定められていました。合計約15万6300円です。

クレジットカードで支払いを済ませると、大白が無言で部屋へ誘導してくれます。廊下にはビニールシートが敷かれていて、感染対策の徹底を感じます。この先にある狭い部屋から、しばらく一步も出られなくなると思うと、憂鬱（ゆううつ）な気分になります。



隔離ホテルの廊下。床にはビニールシートが敷かれ、ドアの前には1日3度の食事が置かれるベンチが置かれていました

■あれ？意外と快適？

ところが、部屋に着いてドアを開けると、「あれ、思ったより広い」。リビングのほか、寝室（ベッドは二つ）、バス、洗面所があり、1人で過ごすには十分すぎる空間でした。お湯を沸かすポットや、ドライヤーもありました。「プレゼント」として、入り口にはペットボトル入りの水（550ミリリットル、24本）が置かれ、トイレトーパーや歯ブラシ、せっけんなどの他、ゴミ袋もありました。意外と快適そうです。

同じく隔離生活を送った日本人に聞くと、私と同じような環境で過ごした人も多かった

ようです。隔離生活は「狭く、汚い部屋で14日間も閉じ込められる」と想像していましたが、そのイメージは早々に打ち破られました。

何かトラブルの起こった時の連絡手段として、ここでも中国版アプリ「微信（ウィーチャット）」が活用されました。入居時、自動的に一行の専用グループも作られ、相談や報告はこの専用グループを使って行う仕組みでした。実際、隔離中にも「テレビがつかない」「みなさんの部屋はクーラーはつきますか？うちはつきません」などのやりとりが飛び交いました。

インターネットは、Wi-Fi環境が整備されていましたが、アクセスできる対象は原則、中国国内のサービスに限られていました。米国の会社が提供しているSNSサービスのフェイスブックやツイッター、インスタグラムは使えません。日本では主流のLINEもです。ユーチューブやグーグル検索も使えません。「外界から閉ざされ、中国に入った」という実感がわいてきます。

1日3度の食事はおおむね予定の時間通りに、部屋の前のベンチに置かれました。大白によっては、食事を置く際にドアをたたく人もいて、ビクッとしましたが、ドアを開けた時には、すでに後ろ姿でした。「できたてのうちどうぞ」という無言のメッセージだと受け止めました。

食事の内容は温かいご飯にシューマイや魚の唐揚げ、ゆで卵や漬物、果物など。朝昼晩で少しずつメニューが違い、気遣いを感じます。日本とは少し味付けは違うものの、おいしく食べられました。

生活ゴミは一つの袋にまとめて、午後1時までにベンチの横にまとめて置いておけば回収されます。部屋から一步も出なくて済む環境は、このように整えられていました。

一方、もし隔離生活に耐えられなくなって廊下に出たりすると、廊下に設置された監視カメラが人影に反応し、けたたましい警告音が響くようです。大白がやってくる時に鳴っていることに気づき、「これは気軽に廊下にも出られないな」と思いました。

■隔離終了までコロナ検査でカウントダウン

最初は快適に感じられた「隔離生活」。とはいえ、3日もたてばだんだん飽きてきます。日付感覚も薄れ、「この隔離生活はいつまで続くのか」と、うんざりした気分になってきます。日中は中国語の勉強をしたり、原稿を書いたり、インターネットの動画を見て運動したりしましたが、やはり時間をもてあましてしまいます。

そんなもやもやした気持ちでいた隔離4日目の朝、部屋に突然、静寂を破る音が響きました。

ドンドンドンー。

時刻は午前9時ごろの朝食直後。食事を置いたサインのドアの音とは明らかに強さが違います。ドアを開けると、大白が立っていました。

そういえばこの日は、数日おきに計4回行われるPCR検査の最初の日でした。大白は私の名前が張られた透明の試験管を見せ、間違いがないことを確認。おもむろに鼻の奥に検査用の長い綿棒を突っ込んで、手早く検査を終えて去って行きます。大連空港の検査ほどでないにせよ、今回もなかなか痛く、これがあと3回もあると思うと気が重くなりました。

ところが7日目、2回目の検査が行われた後、ふと思いました。「あと2回、検査をクリア

すれば、解放だ」。そう考えると、嫌だった検査が解放へのカウントダウンのように感じられてくるから不思議です。次の大白の来訪が楽しみになってきました。

「さあ早くおいで、大白」ー。10日目に行われた3回目の検査になると、大白が来る前から、ドアの内側に立って、そわそわ待つようになりまして。そして14日目の6月27日、最後の検査で陰性結果が出ると、なんとも言えない達成感がありました。

■いよいよ解放

大白は、14日間の隔離期間が無事明けた6月28日の早朝も、部屋を訪ねてきました。今回は検査でも食事でもなく、解放を知らせる来訪です。大連空港から、支局のある北京に向かう航空便に乗る私を迎えに来てくれたのです。

時刻は午前4時。航空便の出発時刻は午前9時だったので、「早すぎるでしょ」とも思いましたが、ようやく外の空気を吸える喜びの方が勝りました。前日、部屋の窓から見える大連の街が、もう見慣れていたはずなのにとても美しく見えたのも、解放感のおかげかも知れません。

ホテル1階のロビーには、同じ便で空港に向かうであろう人たちが大勢集まっていました。フロントからは「集中隔離医学観察解除告知書」と記された紙を渡されました。14日間の隔離期間を無事に過ごしたという証明書です。関西国際空港でスマートフォンのアプリに表示された搭乗許可の「合格証書」に続き、「卒業証書」をもらったような誇らしい気分になりました。

ホテルを出る際、「再見（さようなら）、大白！」と告げると、大白は目を細めて中国語でこう返してくれたように聞こえました。「どうぞ、ご安全に！」

■「謝謝（ありがとう）、大白！」



北京市内でPCR検査を受ける市民

大連から北京に向かう際は、国内線のせいか、検査はありませんでした。北京に移動した6月28日には、中国政府が隔離の期間を14日から7日に短縮すると発表しました。観光客の受け入れはまだ見通せず、当面は私のようなビジネス関係者の入国しか認められないと思われませんが、少しずつ経済活動を再開し、コロナ政策も緩和する方向へと変わってきているようです。

ただ、北京市内での検査はいまだに厳しいです。スーパーマーケットなど、どこかの施設に入る際は、基本的に72時間以内の陰性結果を示さなければ、入ることができません。中国で暮らす限り、しばらく検査は毎日のように受けなければならず、結果を証明するアプリが入ったスマホは手放せないのです。検査は無料ですが、生活には不自由さを感じます。

検査場には、すっかりおなじみになった大白がいます。ディズニー映画「ベイマックス」のキャラクターに由来するその通称には、中国国内でも「本来良くないことを、かわいいイメージでごまかしている」という否定的な意見もあると聞きます。特に3～5月に上海

で実施された大規模なロックダウン（都市封鎖）の際は、怒りを大白にぶつける市民もいたようです。

一方、大白には医師や看護師のほか、ボランティアのスタッフなども混じっています。一部は防護服に名前やメッセージやイラストを書き、少しでも市民を励ましそうとしています。新型コロナ禍が1日も早く終わり、大白が街から消えることが望ましいですが、多くは必死にコロナと戦っているのです。

日本の出発前から中国での隔離生活まで、たいへんな思いもしましたが、大白のおかげで気持ちが楽になった場面も多くありました。そんな日々を振り返って最後に一言。「謝謝（ありがとう）、大白！」